

2023 年度 地域連携活動助成金 活動成果報告書

1 活動概要

活動団体名	「特別テーマ実践科目 C/D」 & 「明治大学「道の駅」研究所」
活動テーマ	三浦市地域における新規事業提案
活動期間	2023 年 4 月 1 日 ～ 2024 年 3 月 31 日
主な活動場所	神奈川県三浦市
連携地域 連携団体等	くろぜむ農園、三浦パン屋 充麦& 3204, 明治大学「道の駅」研究所, 三浦市役所経済部
活動者数	8 名 ※ 活動に参加した本大学の教職員及び学生の人数を入力してください。

2 活動内容 ※活動内容や活動成果は地域連携センターHP等で公表します。

活動目的(地域が抱える課題との関係や活動により期待される効果等、本活動が地域の課題解決や活性化につながる事が分かるように記入してください。)

1. 地域が抱える課題：

神奈川県三浦市は、三浦半島の先端に位置している人口約 40,000 人の市である。東京都心から南へ約 50 キロメートルの距離にあり、市の玄関口である京急電鉄三崎口駅までは、電車で、品川駅から約 65 分、横浜駅から約 50 分、自動車では高速道路経由で、東京 IC から約 75 分で行くことができる。関東圏からの交通アクセスが便利である反面、市内の人口は 54,339 人(1994 年)をピークとして緩やかに減少し続けている(図 1-1)。2014 年には、日本創成会議・人口減少問題検討分科会により、2010 年から 2040 年にかけて、20 歳～39 歳の女性人口が 5 割以下に減少する「消滅可能性都市」と評価され、市の人口は 2030 年には約 38,000 人、2060 年には 21,000 人台にまで減少すると予想される。同時に 1994 年以降も高齢者人口は増加し続け、2020 年の高齢化率は 40.8%で、神奈川県の 25.0%や全国の 28.6%を大きく上回っている(図 1-2)。この人口減少と加速する高齢化の課題に対して、市では、地域経済の活性化と市内への観光促進策、移住促進政策に力を入れてきた(三浦市(2015))。

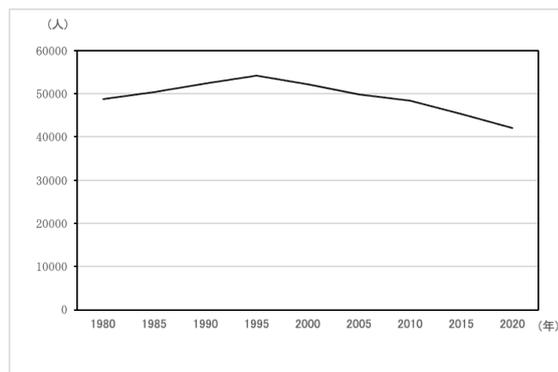


図 1-1 三浦市の人口推移

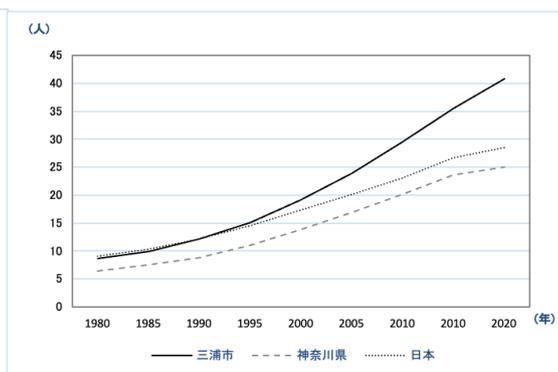


図 1-2 三浦市、神奈川県、日本の高齢化率の推移

資料：三浦市統計月報(https://www.city.miura.kanagawa.jp/soshiki/digitalaka/digitalaka_tokei/1_1/172.html)

資料：「人口・世帯数に関する統計」総務省統計局(<https://www.stat.go.jp/data/guide/1.html>)

三浦市は、関東圏からのアクセスが良いことに加え、マグロやサバ等の新鮮な海産物で知られ、また、三浦海岸、油壺湾などの美しい海岸線が広がり海水浴やマリンスポーツを楽しむこともできる。さらに、江戸時代の寺院や神社などが点在し、日本の文化・歴史に触れることができる等、観光資源が豊富である。このように観光客を誘引する条件が整っていることから、市はこれまで、観光産業を活性化することで、地域経済の活性化と移住促進の政策を実施してきた(三浦市(2015))。市の観光産業データによると、2012 年～2018 年までは、観光客数(図 1-3)、観光消費額(図 1-4)ともに上昇傾向にあった。しかし 2019 年以降は新型コロナウイルスの感染拡大で大きく落ち込むことになった。今年度 5 月にコロナによる行動制限が完全に撤廃され、観光客数は徐々に回復傾向にはある。しかしコロナ禍で、多くの飲食店、宿泊業が廃業をしたため一層の地域活性化、観光振興策の提案が急務である。

また、明治大学商学部では 2006 年より、三浦市との連携のもと「特別テーマ実践科目」において、アクティブラーニングによる実習・実践授業に取り組んできた。具体的には千代田区神田の実学実践店舗「なごみま鮮果」を拠点として、学生が特産品等を実際に販売するという授業が行われた。しかし、同店舗が 2019 年に閉鎖されたため、実学の「場」が失われることとなり、以降は学生による市内での社会調査の実施と新規事業の提案にとどまり、事業の実践までにはつながっていない状況である。

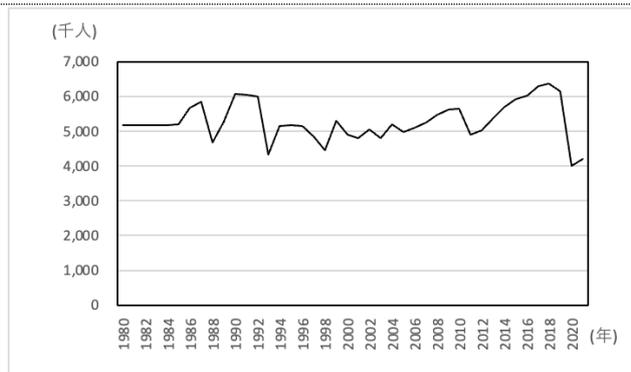


図 1-3 観光客入込客数の推移

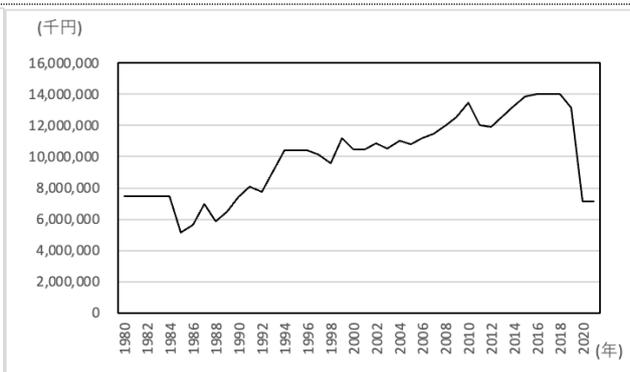


図 1-4 観光消費額(名目値)の推移

資料：三浦市経済部おもてなし課 (https://www.city.miura.kanagawa.jp/soshiki/digitalaka/digitalaka_tokei/7539.html)

以上のように、三浦市に関しては、

- ① 人口減少と高齢化の進行の課題を解決するために、観光振興等の地域活性化が必要であること。
- ② コロナ禍以降の観光産業の落ち込みにより、画期的な新規事業の展開・実施が望まれること。
- ③ 実学実践店舗「なごみま鮮果」という「場」が失われたことにより、三浦市を対象とした「特別テーマ実践科目」の内容が、事業提案にとどまり、実践への展開が困難になっていること。

の3つの理由から、今年度(2023年度)より、授業内容を、大幅に拡大・展開し、地元の団体、産業との連携のもとで新たな事業の提案と推進にまで発展させるために、本助成金の取得を希望する。

本授業は、春・秋の2学期に分けて実施される。春学期(4-9月)「基礎編」では、学生が三浦市を訪れ、地元の祭りに参加する参与観察、地元商店街の街歩きと聞き取り調査を通して、三浦市の現状を把握し、今後の課題を見つけ、課題を解決するための政策提言を行なった。秋学期(10-3月)「応用編」では、前期で提言した政策提言をさらにブラッシュアップし、最終的には事業の実践にまで繋げていきたいと考える。

具体的には、三浦市役所経済部、みうら・みさき「海の駅」、神奈川県立保健福祉大学 田中ゼミ、樋口ゼミ、三浦パン屋 充麦および 3204 bread&gelato、くろぜむ農園、明治大学「道の駅」研究所(2023年7月発足予定)との協力・連携による、産官学によるプロジェクトを立ち上げ、学生によるフィールドワークと新たな事業提案を通して、実際の事業実践にまで繋げたい。各連携団体の活動計画の詳細は、下欄「活動計画」に示すが、主な方向性としては、地元で取れる農産物・食材を利用した新商品を開発し、地元の商店街、海の駅、そして関東地域の物産館、明治大学駿河台校舎での販売を行い、三浦市の観光プロモーションにまで繋げる予定である。

2. 期待される効果：

上記の団体、教育機関、商店会との連携・協力により、学生による新規事業提案、実践は、三浦市の観光振興を中心とした地域活性化の推進に繋がる。プロジェクトの実施で期待される効果の詳細は、以下のようにまとめられる。

- (1) 明治大学の学生が、フィールドワークを通して、地元の人々と交流しながら各自が地域の課題に取り組むことで、学生自身が社会に出た後のキャリア形成に役立つ。
- (2) 三浦市の地域住民が、明治大学の学生に地域の現状を説明し、若者の新しいアイデアを活かした取り組みを、共に行う事は、住民自身が地域の魅力を再発見することにも繋がり、住民の郷土愛と住民同士の結束が強まり、地域に対する活性化のモチベーションが高まることに繋がる。

地域で採れた農産物・食材などを使った新商品を開発・販売することは、地域の魅力を多くの方々

- (3)に広めることになり、三浦市の観光プロモーションに繋がる。
- (4)本プロジェクトを企画した産官学の団体との連携を今後も継続する中で、今回の新商品の開発以外に、新たな観光プロモーションの政策提案等が創出され、さらなる三浦市の活性化に繋がる。
- (5)今後も連携した団体との交流を継続的に進めるなかで、三浦市以外の神奈川県、さらに関東の関連する地域の地方創生の取り組みに、適応・展開させることができる。

参考文献：三浦市「三浦市人口ビジョン：三浦市まち・ひと・しごと創生総合戦略」2015年。

活動計画(活動目的を達成するための具体的な計画や方法、申請団体と連携地域・団体等がそれぞれ担う役割、過年度の活動実績や次年度以降の継続性等について記入してください。)

1. 三浦市役所経済部(経済部 石川博英部長、柴田和義課長、市民協働課 澤口大輔課長)
三浦市内の商店会との連絡・連携の推進。学生の提案したプロジェクトの実現のためのプロモーション。
2. 神奈川県立保健福祉大学(田中和美教授、樋口良子講師、福岡梨紗助教)
三浦市の土産品等の特産物には、マグロ、サバなどの生鮮食品が多く、保存が効き、遠方からの観光客が気軽に持ち帰ることができるような商品が少ないという問題点があった。この問題点を克服するため、三浦市の農産物(野菜)を利用し、保存が効き、持ち運びに便利な新商品の試作、開発を、明治大学との合同チームで実施する。現在はくろぜむ農園で取れたキャベツ、大根等のドライ野菜を使ったシチューの開発とプロモーションに取り組んでいる。
3. みうら・みさき「海の駅」うらり(若澤美義社長)
(1)三浦市三崎港は、日本有数のマグロ基地と知られ、特定第3種漁港に指定されている。漁港の観光拠点である「海の駅」うらり 1Fの海産物売り場では、地元で水揚げされた新鮮な魚介類が並び、2Fの「うらりマルシェ」では地元の新鮮な野菜が販売されている。しかし、施設は1991年に設立されたため、老朽化が進んでいることから、施設の新設を含めた再開発計画を検討中である。新施設のアイデアとして、新たに「道の駅」を加え、道路利用者にも便利な施設の建設を模索している。「道の駅」の機能の付加には、明治大学「道の駅」研究所が協力する。(2)この度、明治大学と県立保健福祉大学が共同開発する新商品を、2Fのマルシェにて販売する予定である。(3)施設内にある市民ホール(450名収容)において、2024年2月に、本プロジェクトの成果報告会を兼ねた「三浦市観光プロモーションシンポジウム」を開催する予定である。(4)若澤社長がこれまで勧めてきた三浦市での映画撮影のプロジェクトを発展させ、明治大学学生が関わり、市の観光プロモーションに繋げる。
4. くろぜむ農園(山田靖子代表)
農園では、昔から伝わる栽培方法で、土づくりを工夫しながら完全露地で野菜を栽培する。主な作目は、大根・キャベツ・ネットメロン・王様トマト・カボチャ・スイカなど。代表の山田靖子氏は、神奈川県下の農業経営に積極的に参画し活躍する女性農業者「かながわなでしこ farmers」に選ばれた。同農園を「場」として、県立保健福祉大学の学生と、明治大学学生、三浦市経済部職員、地域住民が定期的集い、農業体験、バーベキューを介して、共に三浦市の新商品開発について話し合いを進める、
5. 三浦パン屋充麦(蔭山光洋店長)& 3204bread&gelato(星野裕美店長)

三浦市三崎口で麦畑を借り、麦を栽培し、製粉した小麦粉を使用してパンを製造している。さらに、三崎港にジェラート店とコラボした支店を出店している。充麦の蔭山光洋店長は、三浦市に移住した経営者で、三浦市のまちづくり・活性化に取り組んでいる。移住促進政策と観光振興について、明治大学学生が聞き取り調査を行ない、充麦の取り組みに関する報告書を取りまとめる。

6. くろば亭(山田芳央社長)

三崎港で、マグロの解体実演レストランを経営しておられ、観光客に人気である。社長の山田芳央氏は、古くから三浦市のまちづくり・活性化に取り組んでおり、「海の駅」の新設を含めた三崎港の再開発政策の検討会に参加し、今後の「道の駅」設置を含めたまちづくり案を共に検討する。

7. 明治大学特別テーマ実践科目「三浦市」(担当：松尾)

アクティブラーニングの手法により、履修学生6名が現地を訪れ、地元住民との交流を通して、新規事業の提案・実践を行なう。そして、今年度末(2024年3月)には、2006年より2018年度まで継続的に実施してきた実践店舗「なごみま鮮果」における実習実践授業の内容を上回るような成果を生み出すことを目指す。

8. 明治大学「道の駅」研究所(研究ユニット長：松尾)

三浦市、みうら・みさき「海の駅」うらりとの連携のもとで、本研究所のメンバーである一般財団法人日本みち研究所、全国道の駅連絡会、八千代エンジニアリング株式会社と協力して、「道の駅」の新設を含めた今後の三崎港周辺のまちづくり計画を検討する。年度末に予定しているシンポジウムにおいて、新たなまちづくりプロジェクトを提案し、さらなる改善、社会実験を通して、政策実現にまで繋げられることを目指す。

活動スケジュール

1. 申請前活動スケジュール：

(1) 5月10日(水)：明治大学でのゲストスピーカーによる講義(三浦市経済部の協力)

- ・テーマ：「三浦市の現状と今後の観光振興について」
- ・ゲストスピーカー：三浦市経済部観光プロモーション課 柴田 和義課長

(2) 5月28日(日)：現地調査と参与観察の実施(三浦市経済部の提案と協力)

三浦市に伝わる道寸祭に「諸役」として、伝統のある地元の祭事に参加した(図1-5、図1-6)。



図1-5 三浦市道寸祭のチラシ



図1-6 道寸祭の様子

資料：道寸祭実行委員会、三浦市

写真：2023年5月28日撮影、撮影場所：三浦市荒井浜海岸

(3) 6月11日(日)：現地での聞き取り調査の実施(三浦市経済部と神奈川県立保健福祉大学(樋口ゼミ)、くろぜむ農園の協力)

① 三浦市三崎港周辺の商店街の街歩き体験(「海南神社」、「Caba Coffee」、「丸一水産」、「カフェ 3204」)と各商店に対する聞き取り調査を実施した。

② くろぜむ農園において、採れたて野菜と地元の食肉を使ったバーベキュー・イベントを実施し、三浦市経済部柴田課長、市民協働課澤口課長と、神奈川県立保健福祉大学田中先生、樋口先生、福岡先生、学生(田中ゼミ、樋口ゼミ)を含めた 20 名ほどで、今後の三浦市の地域活性化と新規事業の提案について話し合った。

2. 今後の実施スケジュール(予定)

7月5日：明治大学でのゲストスピーカーによる講義(みうら・みさき「海の駅」うらりご協力)

- ・テーマ：「三浦市の現状と今後の観光振興について」
- ・ゲストスピーカー：みうら・みさき「海の駅」うらり 若澤美義社長

9月4日：地域活性化のためのイベント計画、地域への提案づくり

10月18日：現地でのイベント実施(くろぜむ農園での農業体験とバーベキュー)

11月15日～：新商品のパッケージデザインの考案、印刷、商品の製造、販売会の実施(三浦市、駿河台校舎)

12月1日～：1年間の報告書、「ハンドブック 地域の魅力」(地域住民、商店会、県立大学と協力)の原稿作成(2024年)

1月10日：三浦パン屋充麦での交流会と新商品の販売会。

1月23日：1年間の報告書、「ハンドブック 地域の魅力」の原稿の締め切り。

1月24日～31日：明治大学と神奈川県立保健福祉大学、くろぜむ農園とのコラボによる新商品の販売会(三浦市、駿河台校舎)

2月10日：現地でのシンポジウムの開催(1年間の活動報告)。

- ・明治大学と神奈川県立保健福祉大学、くろぜむ農園とのコラボによる新商品の販売
- ・場所：市民ホール(450名収容)
- ・主催：三浦市、明治大学
- ・なお、本シンポジウムは、2024年度以降も年1回のペースで継続して開催することを考えている。

3月15日：活動報告書「ハンドブック 地域の魅力」の出版・配布(300部)。

活動成果

2023年度「特別テーマ実践科目C/D」では、三浦市地域における新規事業提案を中心として、1年間にわたり、学生と共に三浦市の現地調査実習、特別講師の招聘講義、研究会の開催、及び成果物の出版を通して、地域活性化に関する実習実践授業を展開した。主な活動内容は以下の通りである。

5月10日：明治大学でのゲストスピーカーによる講義(三浦市経済部の協力)

- ・テーマ：「三浦市の現状と今後の観光振興について」
- ・ゲストスピーカー：三浦市経済部観光プロモーション課 柴田 和義課長

5月28日：現地調査と参与観察の実施(三浦市経済部の提案と協力)

- ・調査目的：三浦市の現状と地域課題の把握。
- ・調査方法：参与観察。三浦市に伝わる道寸祭に「諸役」として、伝統のある地元の祭事に参加した(図2-1、図2-2)。



図 2-1 三浦市道寸祭のチラシ

資料：道寸祭実行委員会、三浦市



図 2-2 道寸祭の様子

写真：2023年5月28日撮影、撮影場所：三浦市荒井浜海岸

6月11日：現地での聞き取り調査の実施(三浦市経済部と神奈川県立保健福祉大学(樋口ゼミ)、くろぜむ農園の協力)

- (1) 三浦市三崎港周辺の商店街の街歩き体験(「海南神社」、「Caba Coffee」、「丸一水産」、「カフェ 3204」)と各商店に対する聞き取り調査を実施した。
- (2) 「くろぜむ農園」において、三浦市経済部柴田和義課長、市民協働課と、神奈川県立保健福祉大学(樋口ゼミ)と合同で、今後の三浦市の地域活性化と新規事業の提案について話し合った。

6月13日：三浦市経済部柴田和義課長、石川博英部長を訪問し、1年間の授業実施計画について、提案書を共同で作成した。

7月5日：明治大学でのゲストスピーカーによる講義(みうら・みさき「海の駅」うらりご協力)

- ・テーマ：「三浦市の現状と今後の観光振興について」
- ・ゲストスピーカー：みうら・みさき「海の駅」うらり 若澤美義社長

8月29日：特定課題研究ユニット「明治大学「道の駅」研究所」の研究会に三浦市経済部柴田和義課長を招いて三浦市の現状に関するお話を伺い、今後の三浦市での研究所の活動について話し合った。

- ・日時：8月29日 16:00-18:00
- ・場所：グローバルフロント3階 403D 教室

10月3日：三浦市経済部課長が、柴田和義氏から渡辺聡子氏に異動することになり、三浦市の三浦市役所経済部(渡辺聡子課長(新任)、石川博英部長)と「くろぜむ農園」(山田靖子代表)、三浦市観光協会(八島要事務局長)を訪問し、今後の授業運営について協議を行なった(現地の公共交通網が不便で、時間内に移動が困難なため、資料の運搬にレンタカー(ニコニコレンタカー京急久里浜駅前支店6時間レンタル)を使用した)。

10月16日：「地域活性化システム論」(担当：松尾)の講義に、株式会社八千代エンジニアリング専務執行員役の吉兼秀典氏、同事業統括本部の竹田 恵利加氏と小川 耀司氏を招聘し、「日本のインフラの果たしてきた役割とこれからの課題」及び「道の駅におけるPPP/PFI 事業について」というテーマでご講演をいただいた(図 2-3)。「特別テーマ実践科目」履修学生と「地域活性化システム論」の合同授業。

- ・場所：リパティタワー8階 1083 教室



図 2-3 講義後の講師との記念撮影

10月29日：三浦市経済部と「くろぜむ農園」での現地調査を実施。

- ・調査目的：三浦市における6次産業の取り組みについての調査
- ・調査方法：三浦市経済部渡辺聡子課長に対するインタビュー調査、「くろぜむ農園」山田靖子代表に対するインタビュー調査をそれぞれ実施した(図2-4、図2-5)。



図 2-4 農園での収穫の手伝いの様子（芋掘り）



図 2-5 農園の作業所で開いて頂いた研究会の様子

11月16日：「特別テーマ実践科目C」春学期成果報告書ディスカッションペーパー（日本NPO学会DP、2023-001-J）を出版。

(<https://janpora.org/dparchive/pdf/20231101J.pdf>)

11月19日：三浦市における6次産業の取り組みに関して、学生5名で「三浦パン屋 充麦」の陰山充洋代表に対する現地でのインタビュー調査を実施。

11月20日：「地域活性化システム論」（担当：松尾）の講義に、株式会社ちば南房総相談役の加藤 文男氏を招聘し、南房総市の地域活性化と三浦市と南房総市の地域連携についてのご講演をしていただいた（図2-6）。「特別テーマ実践科目」履修学生と「地域活性化システム論」の合同授業。

- ・場所：リバティタワー8階1083教室



図 2-6 講演される加藤文男氏

12月2日：三浦市における6次産業の取り組みに関して、「三浦パン屋 充麦」の陰山充洋代表に対する現地でのインタビュー調査を実施。三浦市で、小麦畑で生産した小麦を製粉し、自家製小麦パンを製造して、工場に隣接する店舗で販売するという6次産業の取り組みの成功に至るまでの経緯について伺った（図 2-7）。



図 2-7 「三浦パン屋 充麦」での調査の様子

12月11日：「地域活性化システム論」（担当：松尾）の講義に、ラジオNHK ジャーナル解説キャスター 山崎 淑行氏、同番組ディレクター 堤 千春氏を招聘し、取材現場から見た地域活性化とまちづくりの現状について、ご講演をしていただいた（図 2-8）。「特別テーマ実践科目」履修学生と「地域活性化システム論」の合同授業。

・場所：リパティタワー8階 1083 教室



図 2-7 講義をされる山崎淑行氏

1月15日：「地域活性化システム論」（担当：松尾）の講義、汎太平洋東南アジア夫人協会副会長の鹿野和子氏を招聘し、地域活性化と女性のエンパワーメントについて、ご講演をいただいた（図 2-8）。「特別テーマ実践科目」履修学生と「地域活性化システム論」の合同授業。

・場所：リバティタワー8階 1083 教室



図 2-8 講義をされる鹿野和子氏

2月9日：活動報告書「地域のチカラ」の出版・配布(500部)

2月18日：「特別テーマ実践科目D」秋学期成果報告書ディスカッションペーパー（日本NPO学会DP 2024-001-J）の出版

(<https://janpora.org/dparchive/pdf/20240222J.pdf>)。

以上のような活動を通して、2023年度「特別テーマ実践科目C/D」における地域活性化の取り組みに関するPBL型のアクティブラーニングによる実習実践授業を実施した。上記の活動は、三浦市への学生による現地調査実習（計5回）と、教員による調整のための出張（計2回）、ゲストスピーカーによる特別講義（計6回）、研究会（1回）により構成される。そして、その成果を、ディスカッションペーパー2篇と成果報告書パンフレット1冊(500部発行)に取りまとめた。一連の活動を通して、学生と共に、地域活性化というテーマに関する現状を把握し、課題に対するより深い解決策を提案することができた。本プログラムでの多くの経験を活かして、卒業後、地方のNPOでボランティア活動を志す学生も現れるなど、活動の成果の大きさに改めて驚かされた。地域活性化は、比較的歴史の新しい学問分野で、この分野は、他の学問分野のように統一した理論がいまだに確立されていない。本分野の修得には、

実際に現地に入り、地域活性化に取り組む地域の方々や、自治体の方々のお話を伺ったり、交流・連携を通じた体験をすることが非常に重要であると思われる。

本「2023年度 地域連携活動助成金」の助成を受けることで、学生に、より深化した実習実践授業を学生に提供することができたことに対して、感謝に絶えません。この助成金でスタートすることができた地域との連携を、今後も継続することで、より充実した地域活性化のアクティブラーニング授業を続けていきたいと考えます。改めまして、本助成金の提供に対する感謝いたします。